

児童生徒俳句大会の作品による俳句の特性と理解

児童生徒俳句大会の選評を終えるに当たり、今回の俳句大会募集作品の一般的な特徴とともに一万句近くの皆さんの作品を選句し、選評を書いていく中で気づいたことがいくつもありますので、今回もまた、それらのことについて、皆さんとともに考え、俳句を作ることの意味や楽しく俳句を作る方法についてお話しさせていただきたいと思えます。

俳句を楽しく作るために

毎年、多くの皆さんが、俳句大会のためにたくさんの方から俳句を寄せてくれます。またそのために多くの先生方や指導者の方々が、俳句作りを通して子どもたちと関わり、子どもたち一人一人の個性を認め、豊かな感性を育みながら表現力を伸ばすことにご尽力いただいています。

そのような人達とともに改めて私たちが作っている俳句について、「俳句とは何か」「どうすれば共感してもらえようかな俳句を作ることができるか」「人の作った俳句をどのように鑑賞すれば良いか」と言うことを皆さん方の具体的な俳句や先人の残された俳句などを参考にして具体的に考えてみたいと思えます。

ここで、俳句を作ることによって皆さんと共通理解しておかなければならないことがあります。それは、俳句は長い歴史をもつ文学作品と言う特性から、算数や数学のように何か一つの正しい答えを出すと言うことは難しいと言うことです。なぜかといえ、一人一人に一つ一つの俳句に対する考え方や俳句観があつてそれは少しづつみんな違っているからです。

したがって、「俳句とはこう言うものだからこのように作る」と言うような固定的な考え方をしたり人に押しつけたりしない、俳句に向かうことが大切になります。つまり、俳句を作るときには、十七音を基本にしなが、見るもの、聞くものなど自分の感動したことを好きなように書きとめていくと言うように幅広く考えて、それぞれの人の考え方も幅広く受け入れながら俳句を作っていくことが何より大切になります。

「上手であるとか、下手である」とか「俳句になつているとか、なつていない」とか言うことはあまり気にしないで、まず自分がここにこのように生かされていることが大切なのです。つまり、「いま自分がここにこのように生かされている」と言うことを全身で感じ取ることが俳句を作ることの出発点にしたいのです。そして、自分がいま人間として何かを見て、何かに触れ、何かを聞き、何かを味わい、何かを感じながら生きていっていると言いたいことをしっかりと受け止めるのです。そうするとそれぞれの人の中に自分の想いが湧いてくることに気付くことができます。その想いが十七音と言う限られた言葉になつて立ち上がってきます。疑いなく自分が一人の人間としてここに生きていると言う証が、十七音の言葉として花開いてくるのです。百人百様、それぞれの顔が違うように、同じものに接しても、人の思いはそれぞれ百様の花になつて開くのです。それをうまく言葉で表すこともできれば、うまくできないこともあります。でも心配しないで、それを今の自分の言葉で書きとめておくのです。上手に言えたときより上手に言えなかった時の方が、俳句としては心がこもり、読んでくれる人の心にも素直に伝わると言うこともよくあります。

俳句は、十七音しかなくて、言いたいことが思い切つて言えないようなところのある文学ですから、上手に言えなかったことの方が、返つて多くの想いや感動を人に伝えてくれることもあるのです。

例えば、昨年行われたワールド・ベースボール・クラシックス(WBC)の準々決勝で3ランホームランを打つて日本を勝利に導いた岡本和真選手はヒーローインタビューで感想を聞かれ「最高です」と一言で答えています。その後、いろいろな場面でも何度も聞かれましたが、やはり「最高です」と一言で答えていました。六回目に聞かれたときには、胸の想いを言葉にしようとして涙をためて言葉を探していましたが、やはり「最高です」と精一杯の真実を込めて一言で答えました。その時球場には最高の拍手が起り、その言葉を聞いた観客も最高の感動を受け止めることができましたが、上手に喋れないことや、多くを喋らないことがかえって大きな感動を呼ぶことを岡本和真選手の一言は私たちに実感として教えてくれました。

また、俳句でもう一つの大切なこととして「俳句は一人称の文学」といわれるように「自分の想いを書く」と言うことがあります。自分の想いを正直に書こうとすれば、その想いをしっかり見つめる必要があります。自分の想いを見つめることは、向き合っている対象をよくよく見つめることにもなり

ます。それは、今まで気づけなかった自分を発見することにもなるのです。これまでの俳句大会の作品は、このような中から生み出されていますので、一人一人の作品は、「他人ごとではなく」自分のために自分自身を書いていると言ふことにもなっています。

俳句は世界一短い詩である

現代では世界中の人たちが、俳句を作るようになっていますが、そこで共通になるキーワードが「世界一短い詩」と言うことです。つまり「俳句は世界の最短詩」と言うことなのです。

俳句は、「五七五」の音（文字ではありません）が基本になりますので、世界で一番短い「十七音」の定型詩になります。簡単にいえば「十七音詩」と言うことで、児童生徒俳句大会の初代の選者であった角川春樹先生は、このような俳句の基本を踏まえて俳句を「魂の一行詩」と表現されています。この短さをこれまでに発表されてきた先人の俳句作品の中で確認していくと、十七音には届かない

咳しても一人

尾崎放哉

動けば寒い

橋本夢道

シャツ雑草にぶつかけておく

栗林一石路

と言うような短いものから、十七音を超える

凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり

高浜虚子

太陽のしたにこれは淋しき

荻原井泉水

うどん供えて、母よ、わたくしもいただきます

種田山頭火

どつと笑ひしがわれには病める母ありけり

栗林一石路

妻よ おまえはなぜこんなにかわいんだらうね

橋本夢道

と言うようなかなり長いものまであります。つまり俳句の長さは、分かりやすくいえば「一息でいえるくらいの長さ」と言うことになるようです。高浜虚子はそのことを「俳句は胸にためているいろいろな思いをひと息にもらす

ようなもの」と言っています。これまでの私たちの俳句大会の募集作品の中には、十七音より短いものや長いものもたくさんありましたが、残念ながらそれらの中には優れた作品として取り上げるような作品はほとんど無く、基本的には十七音を中心に表現した俳句作品でした。

俳句は十七音の定型詩

このように俳句は、五七五の十七音で構成されています。しかし中には全体は十七音ですが、七五五や五七七のように読み方が跨がるような俳句もあります。このように十七音で構成されていても、句跨がりになりリズムが五七五ではない俳句を「定型」の俳句に対して「破調」の俳句と呼ぶこともあります。さらに、俳句の五七五音の定型音律からは少しはみ出し、七七五や八七六になっていたり、五六五や五七四などのように字足らずになったりと「字余り」や「字足らず」の句もありますが、それらも一応定型の枠組みの中に入れて考えています。これら破調の俳句も多くの人に親しまれてきていますので、今回も入選の句に入っています。

俳句は詩である

一方、「俳句は詩である」と言うことでいえば、「詩は心に感じたことを一定のリズムと形式にあてはめて、言葉で表現したもの」なので、日常で私たちが使う文章のような散文とは違うと言うことになります。そして、俳句を含めた詩と言うのは、言葉の表面的な意味だけではなく、美しい言葉で呼びかけて、注意や自覚、良心などを表現する文学の一つの形式になっているのです。また、一定のリズムを持つ韻文で効果的に感動や叙情、心の動きなどを表すための表現上の工夫がなされているものなのです。

簡単に言えば俳句は、感動を自分の言葉で表現する十七音定型詩なのです。したがって、これまでの俳句大会においても、今回の入賞・入選作品にはこれまでと同じように基本的には、「詩」から離れた、散文的な傾向の強いものや説明的な傾向の強いものは入賞・入選作品からは外しています。

俳句が「詩」であることの最も大切な条件は、その作者にしか経験をしたことがない発見や驚き、悲しみや喜びなど深い「感動」があることです。読む人は、作った人の感動に共感することによって、自然や人間などについて深く考え味わうことができるのです。

毎回、作品を選句していく中で、日記や作文の中に出てくる説明文のような作品も多くあります。それらは、読む人には作者の言いたいことはよく分

かるのですが「ああそうですか」と受け取ってしまっただけで、作った人の感動が伝わってきません。俳句では、そのような俳句を「ああそうですか俳句」などと言います。芭蕉もそのような説明的散文的な俳句に対して『去来抄』と言う書物の中で「いひおほせて何かある」つまり、「説明しつくしたとしてもそれはなんになる。それは俳句としての価値は認めることができない」と言っていて、説明的な表現を戒めています。

ここで、「いい過ぎ」や「説明しすぎ」「散文的になっていく」俳句について説明してくれている、面白い事例がありましたので、それを紹介してみたいと思います。

ここで取り上げられているのは「コスモスや」の句で、「コスモスや風に揺れたるころもち」と言うものでした。同じような句が、本大会の投句作品にもたくさんあり、よく見かける説明的な句の特徴を表しています。この句をよく読んでみようと、一見いい句のように見えるかもしれませんが、「風に揺れる」と言うのは「コスモス」と言う言葉の中にすでに含まれているイメージなのです。つまり「いわずもがな」のことなのです。コスモスといえは、「風に揺れる」「ピンク」「やさしい」「はかない」と言うような言葉は、誰でもが普通に思い浮かべる一般的な言葉なのです。つまり、「コスモス」に対して「風に揺れたる」と言うのはコスモスの一般的な説明をしているに過ぎないわけで、わざわざ短い十七音の中で言わなくてもいいことなのです。

したがって、そのようなコスモスのもつイメージは、「コスモス」と言う言葉に任せてしまい、作者は深入りして説明せずに省略することが俳句を作るときには大切なのです。

このような例として昔から「板敷きに下女取り落としたる海鼠かな」と言う俳句が取り上げられてきました。最初の省略は、「板敷きに落としたる海鼠かな」と言うように「下女」と言う言葉の省略です。それをもっと省略して「取り落とし取り落としたる海鼠かな」と「板敷きに」と言う言葉を省略するように推敲するのです。

現代では生活が複雑になり、見るもの、聞くもの、感じるものも複雑になっただけで、いいこと、訴えたいことが、十七音の枠を越えていくことは当然の成り行きですが、俳句では、その言いたいことを省略して十七音にまとめて表現するのです。そう言う意味で言えば、俳句はものを言わな

いと言いか、ものが言えない「省略の文学」と言うことができると思います。
季語・季題について

俳句のもう一つの特徴として季語があります。「季語」とは季節を表す言葉で、俳句では一句に一つの季語を入れると言う約束事があります。

夏草や兵のどもが夢の跡

松尾芭蕉

この句は有名な芭蕉の『奥の細道』の中に出てくる一句なのですが、ここでは「夏草」が夏を表す季語になっています。

この季語について、季語と季題を使い分けて使う人もいます。その場合の季語は季節を表す言葉全般をさしているのに対して、季題は俳句を作る時の「席題」などの題にする季語のことを言います。題詠で季語を題にするとき、その季語のことを季題として、季語と言う言葉とは使い分けるのです。しかし、この説明においては、一般的に使われているように季題も季語も区別せず一つにまとめて「季語」と言う言葉として使っていくようにします。

俳句は十七音と言う短い表現になっていますので、感動を人に伝えるためには、どうしても一句の中には、普通の言葉とは次元の違う印象的で象徴的な強い言葉が求められます。俳句では、そのような働きをする言葉を季語として一句の中に取り入れて、詩情を高めてきました。

特別な場合は別として、季語が入っている「有季」と言うのが、俳句を作る時の伝統的な約束になっています。この季語も時代の流れとともに変わってきていますので、季語に対する受け止め方も人によって様々であって、考え方もいろいろあります。中には、

しんしんと肺碧きまで海のたび

篠原鳳作

湾曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

戦争が廊下の奥に立ってゐた

渡辺白泉

いっせいに柱の燃ゆる都かな

三橋敏雄

広島や卵食う時口開く

西東三鬼

木の股の猫の向こうの空気かな

橋間石

号泣やたくさん息を吸ってから

池田澄子

と言うような季語のない無季の俳句を作る人もいますが、その場合でも一句の中には、季語に代わる詩的な象徴的な言葉が「詩語」として位置づいています。

歳時記を開いてみますと、現代俳句協会が中心になって編纂した『現代俳句歳時記』には、季語のない無季の俳句を「雑」の部としてたくさん取り上げています。また、『季題別飯田龍太全句集』では、季語のない俳句を「雑」として十九句、別に取り上げて例もありません。

季語のない俳句を東北大震災の惨事特集した俳句雑誌の中で見たことがあります。その時、有季定型を基本とする俳人が無季の俳句を発表しました。私は発表された俳句を見てあのような惨事の中では季語を越えた表現になることを改めて教えられました。

また、一方で「冬の朝ガラス細工のかたつむり」の中でも説明しました。季語の重なる「季重なり」も問題になることがあります。

「季重なり」は、一つの俳句に季語が二つ以上入っている俳句をいいます。原則として、一つの俳句に季語は一つで作るのが俳句を作るときの暗黙の約束になっています。ただ、一句の中に仮に二つの季語が使われていたとしても、そのどちらかに、明らかに焦点が絞られていれば、必ずしも俳句としてだめな作品と言うことはありません。しかし、俳句の約束事になれるまでは、季重なるの句はできるだけ避けた方が俳句としての乱れは少なくなります。

この「季重なり」については、

秋風や桐に動いてつたの霜

芭蕉

稲こきの姥もめでたし菊の花

芭蕉

ほととぎす啼くや五尺の菖草

芭蕉

鶯や卒然として霞める日

虚子

春寒もいつまでつづく梅椿

虚子

蚊の去りしあとあかつきの青葉木兎

秋桜子

霜月の霜なく立てり青芭蕉

秋桜子

など芭蕉や高浜虚子、水原秋桜子などの句の中にもたくさんありますし、歳時記の中にも「季重なり」の俳句は見かけますので、季語が重なっているだけでは、一概に俳句として否定することは出来ません。

しかし、十七音と言う短い一句の中で季語のように中心になる強い言葉が二つ三つと重なる俳句の中心が割れてしまい、まとまりがなくなり美的ではなくなることが多いので、中心を一つに絞ることが求められます。（これも河東碧梧桐たちの無中心俳句と言う運動もありましたので一概には言えません）

したがって「季重なり」になっても一つの季語が強くて主になり、もう一つの季語が副になって支えているような場合は、俳句として立派に成り立ちますので、季重なりと言うだけで、その一句を否定することはできません。

また、私がよく「季重なり」の俳句の例として出す山口素堂の

目には青葉山ほととぎす初鯉

山口素堂

と言う有名な句などは、三つも季語が重なっていますが、視覚としての「目」には青葉、聴覚としての「山ほととぎす」、味覚としての「初鯉」と言うように感覚で統一されていますので、「季重なり」が逆に有効に生かされています。

「切れ字」について

俳句では、「切れ」が大切であり、「切れ」を作るために使われる「や」「かな」「けり」のことを切れ字と言います。俳句ではこの切れ字が特に大切だと言われています。切れ字を使った俳句としては、

古池や蛙飛びこむ水の音

松尾芭蕉

月天心貧しき町を通りけり

与謝野蕪村

などが特に有名で教科書の中にも紹介されています。「切れ」があると俳句が引き締まり、余韻が出てきます。この「切れ」は、俳句独特の特性です。で、きちんと理解しておく必要があります。この俳句における「切れ」を見ていくと、今回の作品の中には「や、かな、けり」と言う切れ字を使っていないのですが、

『ししおどし』 大気圏まで響かせる

『山粧う』 父の選んだワンピース

『霜柱』 田畑を起こす底力

『冬の朝』 ガラス細工のかたつむり

のように上五の名詞で俳句が切れているものもあります。俳句の「切れ」は、文字通り内容を切り分けたり、余韻を持たせたりする働きがあります。俳句は最短詩ですから、十七音を途中で切って内容を分け、余韻を持たせることで、詩的な世界に膨らみを生み出します。

切れ字の役目は、その前の語句の意味を強調したり、俳句を詠むときにそこで一瞬息をついたりして、その語の持つ意味や印象をより鮮明に印象深くするなどの働きがあります。五七五を切れのない一章で表現してしまうと、一句がやや縮まりのない感じになってしまいます。「や」「かな」「けり」などの終助詞に限らず活用語の終止形や命令形など、また名詞なども、一旦そこで切れる場合は、広い意味では、それらも切れ字と言えます。

冬の水一枝の影も欺かず

中村草田男

の句も「冬の水」で一旦切れていますので、それは切れ字と言うことができず。また、十七音を途中で切ることによって、その直前の言葉強調したり、アクセントをつけたり、感動したポイントを詠嘆したりして読む人に分かりやすく伝えてくれます。読む人が「や」「かな」「けり」で詠嘆されるとなんとなく俳句らしく感じるのもそのような働きがあるからです。

例えば「目の前に真っ赤な花が咲いている。空は雲ひとつなく晴れ渡っている。」と書かれたら、眼前に真っ赤な花が残されたまま、雲ひとつなく晴れわたった空に映像が映っていき直前の花の色が強調され臉に残ります。この例文のような働きが俳句の「切れ」にはあるのです。

さらにもう一つ、一句の中の「切れ」は一つだけと言う暗黙の了解があります。一つの俳句に二つの切れが入ってしまうと、その俳句は「三段切れ」と呼ばれ、俳句における「切れ」の効果を失ってしまい、逆に一句がばらばらになり、単語の羅列のようになってしまいます。もちろんこのことも俳句のきまりとして「絶対にダメだ」と言うことではありませんが、「切れ

字」を使って俳句をぶつぶつ切ってしまうと美的な世界が壊されて粗雑になり、短い俳句がばらばらになって、まとまりがなく味わいが浅くなるので、できるだけ避けるようにしています。

しかし、水原秋桜子は最後の辞世の句で「紫陽花や水辺の夕餉早きかな」と言う「や」「かな」の重なった句を作っていますし、中村草田男は、「降る雪や明治は遠くなりけり」と言うように「や」と「けり」の重なった句を作っています。このように「切れ字」を二つ使ってもこれが有効に働く場合は作品として立派に自立すると言うことです。

ここで「俳句の切れ」の働きをまとめてみると、「余韻をもたせて表現を大きくする」「感動のポイントを分かり易くする」と言うことです。ちなみに、これまでの全国児童生徒俳句大会の選で「や、かな、けり」など切れ字が二つ重なっている作品は、入賞作品の中には見当たりませんでしたので、入選作品の中には入っていません。

俳句の構成について

五七五の十七音がどのような組み立てになっているか、つまり俳句の基本的な構成を考えることがとても重要になりますので、少し考えてみたいと思います。

俳句では、「五七五」の作品を一つのまとまりとして述べる方法を「一句一章の句」とか、一物（いちぶつ）仕立ての句」とかいいいます。その例としては、

流れゆく大根の葉の早さかな

高浜虚子

銜して山ほととぎすほしいまま

杉田久女

滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

一月の川一月の谷の中

飯田龍太

再軍備絶対反対胸まで焚火

柏原和男

野に來れば野にはとんぼの眼満つ

田原千暉

雛壇に置き忘れたる貝釦

飴山実

草餅を焼く天平の色に焼く

有馬朗人

蛇下げて来し子に弥撒の座のくづれ

宮田カイ子

まっすぐに雪の束来る鯉の村

松田ひろむ

山一つ超せば余寒のピアノ鳴る

秋篠光広

雑煮食うも骨を拾うも箸の国

河野輝明

村じゅうの夕日集めて稻を刈る

足立町子

かたつむり雨のアンテナ右左

樋野葵人

ゆたんぼの祖母のぬくもり抱いて寝る

森千紘

彼の名をつけた子猫をそっとなで

住吉奈々

少年の手話にからまる花の雨

牧野桂一

などの句があります。今大会作品では、

朝顔の青が一番好きな色

松尾青葉

大地から力をもたらって桜咲く

何世豪

御朱印の止め跳ねまねて筆始め

福良隆太

新しい制服を着て墓参り

河野向日葵

高気圧せり出す空を鳥渡る

吉良一優

などが一句一章の句とすることになります。つまり「全体が季語に関係すること」でまとまっているとすることです。また、五七五が句の中で切れているのを「二句一章の句」とか取り合わせの句」とか言うのですが、その例として、

春風や闘志抱きて丘に立つ

高浜虚子

冬菊やまとふはおのがひかりのみ

水原秋桜子

藪の露連山影を正しゆうす

飯田蛇笏

女来と帯び捲き出る百日紅

石田波郷

萱寒し日本国立療養所

田原千暉

夕焼けやパンとは立ちて食うものか

柏原和男

啄木忌君らが灯す春田の寮

古沢太穂

白梅や仏を入るる経の声

飴山 実

祇園会や千の乙女の千の櫛

有馬朗人

名月やはばたくものを籠の中

秋篠光広

一月や捨つべきものは早捨てて

倉田紘文

吾亦紅揺れたいときに風がない

足立 攝

エプロンの袖口に風大根干す

大野洋子

晩秋や色を視察に来た工夫

畑本伸行

父ちゃんの働く背中冬木立

神野知希

などの俳句があります。今大会の作品では、

山粧う父の選んだワンピース

安居瑞海

ししおどし大気圏まで響かせる

白須璃子

昼の月背面跳びで抱き留める

松井宏志郎

霜柱田畑を起こす底力

吉井咲喜

冬の朝ガラス細工のかたつむり

高橋美優

などが二句一章の作品とすることになります。つまり「『季語』+『季語』に関係の無いこと」や「『季語』+『季語』」とすることです。したがって俳句を鑑賞するに当たっては、私たちは知らず知らずのうちに胸に伝わってくる感動がどのような構造になっているかを自然に感じているようです。俳句を作ったり推敲したりするときこのことを頭に入れて

おくと俳句の世界が広がってくると思います。インターネットを開いてみると同じようなことがコスモスを例にして紹介されていました。

「コスモス」は四音になりますので、上の五音にするために何か一音足す必要があります。つまり「コスモスの」「コスモスを」「コスモスに」などと考えていくのですが、その中で一句一章になっているものを少し紹介します。

コスモスはどこにありても風少し

細見綾子

コスモスもすがれる蝶も露しとど

水原秋桜子

コスモスはきりかぶ山のかみかざり

宿利隆太

また、このコスモスで二句一章の句にするために「コスモス」に切れ字の「や」をつけて「コスモスや」としています。「や」は切れ字の働きをして強い詠嘆を表しますので、「美しいなあ。もうこんなにくさんコスモスが咲いているよ」とか「わあ、可愛らしい。こんな所にコスモスが咲いているよ」と言うように状況を表現してくれます。それらの作品を少し紹介します。

コスモスや二戸相倚れるこけら葺

阿波野青畝

コスモスや倒れぬはなき花盛り

松本たかし

コスモスや光かがやく墓ばかり

村山故郷

コスモスや墓銘に彫りし愛の文字

富安風生

コスモスや旅路は同じ帰路をとる

稲畑汀子

インターネットの中の紹介では、「コスモスやもうすぐ妻の誕生日」と言う句が紹介されていました。

類句、類想句、模倣句について

今回の選句においても入賞、入選の作品として採用しなかったものに、類句、類想句、模倣句と言う問題があります。「類句、類想句、模倣句」は、

同じような発想で同じような俳句を作ると言うことです。

俳句は十七音しかない短い表現ですので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれやすい傾向があります。そのために、様々な俳句大会などにおいても工夫しながら類句、類想句、模倣句を顕彰し吟味して入賞を決めています。

本大会の選句に当たっても、基本的には類句、類想句は入賞、入選句からは外すようにしています。類句、類想句、模倣句を調べるために今回も、児童生徒俳句大会の過去の作品に対して事務局で吟味しました。また、全国的な大会での入賞作品に対しては、連携している各種俳句大会の事務局に、今次大会の特選以上の入賞候補作品を送り、詳しく吟味していただきました。そして、そこで類句・類想性や模倣性が強く感じられる作品については、入賞や特選から外しました。このような類想句や模倣句については、十七音と言う短さの特徴とする俳句の持つ宿命のようなもので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれるのは常といっているくらいです。そのため、大きな俳句大会などにおいても過去に他の大会で入賞した句が、別の俳句大会で受賞したりして問題になることもあります。そのような場合には「受賞を取り消す」と言うことになっているようです。

しかし、俳句を作るときに、類句、類想句を恐れて、俳句をのびのび作ることが出来なくなってしまうと困りますので、「自分から進んで意識的に真似をする」ことは避けるとしても、結果として類句、類想句になることは、必要以上に気にしないで良いのではないかと思います。有名な芭蕉も「自分の句が他人の句に似てしまうより、実は自分が似たような句ばかり作っていることに気付かないものです。これを避けるには深く考えて味わいながら句をつくることです。もし、類句を作ってしまったら迷わず自分の句を捨てなさい」と言っています。そして、芭蕉自身も「須磨は暮れ明石の方はあかあかと日はつれなくも秋風ぞふく」と言う歌と関わって「あかあかと日はつれなくも秋の風 芭蕉」と言う俳句を作っています。また、別の例に

中村草田男

降る雪や明治は遠くなりけり

志賀芥子

という俳句がすでにあつたと言うことなど有名な話もあります。

他にも「良寛と一茶」に、

焚くほどは風がもてくる落ち葉かな

良寛

焚くほどは風がくれたる落ち葉かな

一茶

や「池西言水と山口誓子」に、

凧の果はありけり海の音

池西言水

海に出て木枯帰るところなし

山口誓子

「川端茅舎と多賀よし子」に、

一枚の餅の如くに雪残る

川端茅舎

一枚の餅の如くに乱れたく

多賀よし子

「森澄雄と鈴木真砂女」に、

豨蕨(めなもみ)や旅につかれしふくらはぎ

森澄雄

初蛙旅の疲れのふくらはぎ

鈴木真砂女

「森澄雄と日美清史」に、

かたかごの花や越後にひとり客

森澄雄

かたくりの花や常陸にひとり客

日美清史

「池田澄子と權未知子、奥山まや」に、

新鮮に死んでゐるなり桜鯛

池田澄子

いきいきと死んでゐるなり水中花

權未知子

いきいきと死んでゐるなり兜虫

奥山まや

などと上げていけば枚挙にいとまがありません。

今回も既に他の大会で賞に入っていたりする作品や俳句の書籍の中に掲載されている作品がありました。考え方によれば、その作品は誰が見ても優れていると言ふことなのですが、本大会においては、先に発表された作品を優先するとすると言ふことで、すでに発表された作品がある場合は、入賞・入選作品から外すことにしました。他にも全く同じではありませんが、とてもよく似ている類句についても、先に作った人の作品を優先すると言ふことで、同じよ

うに入賞・入選から外しました。

俳句における推敲について

俳句を作っていく時、もう一つ大切なことがあります。それは、「推敲」と言うことです。推敲と言うのは、一応できあがった俳句をもう一度見直しての質を高めるために、一句に表現した字句を吟味して、練り直すと言うことです。ここでは推敲していく時に特に大切になることを紹介しておきます。

まず最初に、読み直すと言うことです。それも俳句ですので、声に出して、できれば朗々と読み直すことがとても重要になります。芭蕉はそのことを去来抄の中で「舌頭千転せよ」と言つて、「何度も何度も舌の上に乗せて読み返すこと」を勧めています。俳句ではリズムや調べが特に大切ですので、読み返しているうちによりよいリズムのある表現を獲得できるのです。また、この読み返しは、誤字脱字言葉遣いの間違いを見つけることにも繋がります。さらに、この読み返しの中で、同じ音の繰り返しや韻の踏み方、あるいはオノマトペの響きはどうかななどについても考えていくことができ、俳句としてより深い表現ができるようになります。

次に、このできあがった俳句を客観的に他人の目になって読み直すことも必要になります。その時、自分の表現したかったことが素直に書けているかどうかと言ふこととか、人が読んで真意が伝わる表現になっているかと言ふことを吟味していくことが必要になります。このためには、作った俳句を一日おいて推敲するという人もいます。

一方、季語や言葉、語彙のチェックをしていくことも作品を仕上げるためにはとても大切になります。季語の使い方は、特に重要ですので、有効に働いているかどうかということ、別の季語に置き換えをした方が良いのではどうかと言ふことなどを丁寧に検討する必要があります。言葉や語彙については、重複はないか、言い間違いはないかなどについて辞典を活用しながら検討し、間違いがあれば訂正し、重複表現があれば削るようにし、同じような表現があれば吟味し省略するようにします。

次に、言葉の語順は現状のままでも良いのかと言ふことを考え、しっくりいかなければ語順の入れ替えを試みてみます。常套的な句や手垢の付いた通俗的な語句がないかを見直し、あれば、新鮮なその場に合った具体的な表現に

変えていきます。加えて、漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字・数字、外国語などの表記が効果的かどうかとすることも検討し、適切な表現に直していきます。助詞の使い方も俳句では独特な使い方をすることもありますが、ここでの使い方が適切かどうかを検討し、その場面に合ったものに置き換えていくようにします。

最後に、この作品に「類句、類想句、模倣句」があるかどうかを検討する必要があります。もし意図的に真似た部分があれば、この作品は、公表することを差し控えるようにしてください。

俳句における分かり易さ

今回もこのように、選評を書かせてもらおう中で、俳句における分かり易さと言うことを度々考えさせられましたので、この機会に考えてみたいと思います。

俳句はやはり文学ですから人に伝えると言う大切な機能があります。このことから考えると「分かり易い」と言うことは、とても大切な要素ですが、分かり易いだけでは人を感動させるような作品にはならないと言う問題もあります。芭蕉以来、多くの先人の優れた作品を読みますと、確かに分かり易い俳句もありますが、理解するのが難しい俳句もあります。読み手としては、分かり易い俳句に親しみを感ずますが、だからといって俳句は分かり易い俳句がいい俳句であると決めつけることはできません。一見難しいと思われる俳句も、難しい言葉を辞書で引いて確かめたり、分からない所を人に聞いたりしながら、丁寧に読んでいくとその俳句の良さや魅力に出会うことができることがあります。実はそこに俳句のもう一つの価値があるのです。そのように考えると俳句は自分の作品を作ること、人の作品を鑑賞することとを同時に行うことが、とても大切になるのです。

芭蕉は、「自分は句を作ることには一番ではないかも知れないが、俳句をさばく(選句をして鑑賞する)ことでは人に負けない」と言うようなことを言っています。皆さんも、このように自分で俳句を作るとともに、この機会に是非、多くの人の作品を読んで味わう楽しさを学んでもらいたいと思います。

俳句は昔から「衆の文学」と言われるように、お互いに仲間の作った作品を読み合って、その作品の分からないことや良いと思ったことなどを仲間同士で話し合っって意見を交換することを大切にしてきました。そのようなコミュニケーションが俳句の中ではとても大切なのです。

俳句の言葉を増やすために

私は、全国児童生徒俳句大会の始まった頃から二十年近く、地域の公民館の子ども俳句教室で小学生と一緒に俳句を作っていました。その教室には、全国児童生徒俳句大会の選者で私の俳句の先生であった有馬朗人先生も大分に何回か来て直接子ども俳句の指導してくれたこともありました。その時、小学三年生の女の子が有馬先生に、「良い俳句を作れるようになるためには、どんな勉強をしたら良いですか」と質問をしたのです。その時、有馬朗人先生は、「毎日、国語辞典を一ページずつ読むのがいい」と教えてくれました。国語辞典を一冊全部読み上げれば、私達の生活に必要な言葉は、ほとんど学ぶことができるからです。

早速、全員で『子ども歳時記』とともに『国語辞典』を読む勉強を始め、全員が季語だけではなく、沢山の言葉を知り、それを俳句の中で使えるようになったので、子ども俳句の仲間には、見違えるようにレベルの高い俳句が作れるようになりました。そして、それは俳句だけではなく、他の教科の勉強にも広がって、担任の先生をびっくりさせたのです。それ以後、私は子ども俳句会で縁のできた仲間には、必ず小学生用の『国語辞典』をプレゼントすることになっています。

俳句の勉強のしかたについて

俳句を学ぶ最も良い方法は句会に参加することです。この句会と言うのは分かり易く言えば俳句の勉強会ですから、それぞれのグループによっていろいろなやり方があります。ここでは、私が公民館の子ども句会で行っている方法を紹介しておきたいと思います。句会といっても小さな少人数のグループで楽しむ句会から、学校などで数十人集まってする句会までさまざまあるのですが、私たちの公民館子ども句会では、二十人くらいで行っています。句会に当たっては、まずあらかじめ句会に投句する俳句の数(出句数)を決めておきます。参加する人は、句会に参加する前に決められた数の俳句を作っておきます。(先日行った玖珠町立八幡小学校での句会では、句会の前に学校の周りを散策して俳句を作る吟行をして句会に出す作品を作りました。)

句会に参加するために最初は、自分の作った作品を持って句会に出掛け、

会場では俳句を書く「短冊(細長い紙)」が配られますので、あらかじめ作っておいた俳句を短冊に書いて提出します。この時、自分の名前は書きません。句会の世話をしてくれる人が、集めた短冊をばらばらにして参加者に分け、その短冊とともに清記するための用紙を配り、参加者に清記してもらいます。

次に、配られた短冊の句を清記用紙に清書します。この時、間違えないように丁寧に楷書で書き写します。全部書き終えたら、その清記用紙に時計回りに「一」「二」「三」と番号をつけていきます。

その次には選句をします。清記用紙を右の座席へ右の座席へと回していきながら、回ってきた清記用紙の句の中から、良いと思った句を選んで自分のノートなどに書き写していきます。そして、すべての句を見終わったら、決められた数の句をさらに選んで、選句用紙に清書します。この時、用紙の右端に「牧野桂一選」と言うように、誰が選んだ用紙かが分かるように自分の名前を書いておきます。そして、全員の選句用紙を集めて、いよいよ俳句の披講が始まります。

披講では、それぞれの人が選句したものを句会の世話をしてくれる人が読み上げていきます。俳句の披講ですから歌うように声高らかに吟ずることが求められます。この時、自分の句が読み上げられたら、「桂一」と大きな声ではっきりと名乗りを上げます。

披講が終わったら、合評です。合評では、それぞれの作品について、その作品の良かったところや問題になるところなどについて自由に意見を出し合っていきます。合評の最後には、その句会の世話人や指導者が、総合的な批評をしていきます。子ども俳句会では、選に入らなかった句も含めて全部の句について批評することが勉強のために大切になると思います。

吟行について

俳句会の説明の中で、吟行と行うことを紹介しましたが、この吟行は俳句を作る人たちにとっては、とても大切なものです。吟行と言うのは、俳句を作るために実際の景色を見て、季語と出会うために外へ散策に出て行くことをいいます。俳句を作りながら(吟じながら)歩くと言うことで「吟行」と言うのです。特に俳句をつくるために、郊外や名所など景色のよい所や旧跡などに出かけて行くことをいっていますが、最近では、外国にまで出かけていくような大がかりなものもあります。先輩や仲間と一緒に出かけ、同じも

のを見て俳句を作るので大変勉強になります。自然に触れて、そこにあるものを通して俳句を作るので、草や鳥や虫などの季語を覚えることもでき、とても有意義なものです。

俳句における選句について

俳句の特徴として、選句があります。つまり自分で俳句を作るだけではなく、人の作った俳句の善し悪しを選別して良い句を選ばなければなりません。「どう言う俳句が良い俳句なのか」を考えて自分で選ばなくてはなりません。慣れない時にはとても戸惑ってしまいます。この選句の場で「どの俳句が良くてどの俳句が悪いのか」を考えていく場合大切なことは、自分が好きかどうかと言うことです。つまり、その作品を自分自身が読んだ時に、すっと心の中に入ってくるもの、単純に「この俳句には引きつけられ、自分は好き」と思う俳句が、その人にとって一番良い句と考えるのです。

このように言うと、「本当にそれでいいのか」と少し不安になるかも知れませんが、俳句を読んだ新鮮な自分の感覚が大切なのです。なんの雑念もなく、真つ新たな心で選ぶことができるのは、読んだ自分の新鮮な気持ちしかありません。だから、どこまでも自分の感性、価値観を信じて選ぶのが一番なのです。良い句を探す時は、自分が良いと感じる句を探すのが大切で、他人が良いと感じる句を探すのではないと言うことです。人はそれぞれ他人とは違う感じ方をするのが当たり前です。この違いが俳句では大切なのです。これは、俳句を作る時と全く同じ事です。人の意見に同調ばかりしていると、人とは違う感じ方をするのが出来なくなります。「人とは違う感じ方をする」「自分らしい感じ方をする」ことが、文学である俳句の最も大切な要素でそれが俳句を作る原動力になり俳句を作る喜びにもなります。

結論的に言えば、「自分が好きだ」と思う俳句が良い句と言うことになりませんので、選句に当たっては、自分の感性を信じて、周りの意見に迷わされないで、自分の好きと思う句を選ばばいいのです。他人の感性ではなく、あくまで自分の感性を信じるのです。そして、その選んだ俳句を何度も何度も読み返し味わいながら、参考にして勉強することが、俳句の最も良い勉強になると思います。

高浜虚子は「選は創造なり」と言うように周りの人たちに教えていました。つまり、俳句では、人の作品の選をすることは、自分の作品を創ることと同

じように大切であることを教えてくれているのです。

ここで、今回の俳句大会の入選作品の選句について、説明を付け加えれば、私たち選者は、特別な俳句の指導をする指導者ではありませんので、みなさんの作品を添削するようなことはしておりません。一般の句会で選をするのと同じように、私達選者の良いと思った作品を選んでいます。したがって、誤字脱字や表記に明らかな間違いのあるもの、内容を読み取ることができないものは、いくら内容が良くても入賞・入選句の中には入っておりません。

子ども俳句指導者へのお願い

最後に俳句の学び方について、野見山朱鳥がある著書の中で面白いことを教えてくれていますので、子ども俳句を指導している皆さんに紹介したいと思います。

俳句雑誌「ホトトギス」の黄金時代を作った俳人に村上鬼城と言う人がいました。その鬼城は句会の指導で、選に漏れた作品を取り上げ、その欠点について詳細に解説したそうので、その指導の仕方が的確で分かり易くみんなを納得させるものであったため、鬼城に俳句の教えを乞う人がたくさん出てきたといえます。

一方、俳句雑誌「ホトトギス」の主宰者である高浜虚子は、入選した作品の良いところを指摘して誉めるだけでした。この二人の指導の結果として高浜虚子の弟子からは、次々と俳壇をリードしていくような優秀な俳人が出てきました。村上鬼城の門からは、虚子の門下ほどには、俳壇をリードしていけるような俳人は生まれなかったと言っています。

人は、自分の欠点は案外自覚しているのですが、長所は自分にはなかなか見え難いと言うことでしょうか。指導する方としても、俳句の欠点を探すのは割に簡単にできるのですが、逆に良いところ、優れている所を見つけることは、難しいと言うことも知れませんか。

ちなみに有馬先生は子どもの俳句の指導の中では欠点を言ったり、添削したりすることはほとんどなく、一つ一つの作品の良いところを取り上げて丁寧に教えてくれました。

これからも子ども俳句会などで児童生徒の俳句の指導にあたり、皆さんが中心になって句会をしたりして、俳句を人に教える機会がある時には、

このことも俳句の一つの特性であると言うことを覚えておいていただけたら参考になるのではないかと思います。